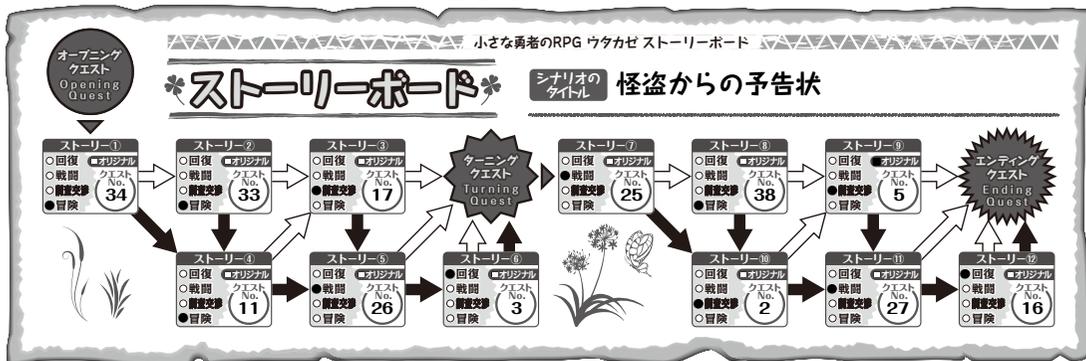


シナリオ：怪盗からの予告状



シナリオ作成：片桐あお

シナリオレベル：2

予定セッション時間：1時間30分

GMレス：不可

■プロローグ

みつこぶ丘のマラに南側。澄んだ水が満月を映し、水辺の細く長い草が夜風に揺れて擦れ合い、心地よい音色を奏でています。

ここは、カエル族の暮らす緑沼の王国。

耳を澄ませば、どこからかカエルたちの合唱が聞こえてくることでしょう。

しかし、この日は違います。

聞こえてきたのは、カエルの鳴き声でも歌でもなく、1匹の女イタチが上げる高笑い。

「チーッッチッー。カエルさんこちらーここまでおいでー。私を捕まえられるものなら捕まえてみるッチ」

イタチは黒いマントをまひかせながら、目に止まらぬ速さで、緑沼の湿地帯を駆け抜けていきます。

そして、それを追いかける王国の兵士たち。

「待つケロ！ 怪盗ヴァロッサ！」

「俺たちの宝を返すケロー！」

「今日こそ捕まえてやるケロ！」

しかし、泳ぎが得意なカエルが、素早い足を持つイタチに陸上で追いつけるはずもなく、みるみる距離が開いていきます。

すると、ヴァロッサは近くの木のてっぺんに登り、カエルたちの追跡を嘲笑うように見下しました。

その右手には、緑沼の王国から盗んだダイヤのような宝石が――

「これがカエル族のお宝といわれている“水龍の瞳”。

何度見ても美しい。やはり美しいものは、美しい私のもとにあるべきだッチ」

愛おしく宝石を眺めるイタチにとって、下にいるカエルたちのことなどまったく眼中にありません。

「早く降りてくるケロ！」

「おとなしく宝を返すケロ！」

その声は、ヴァロッサはカエルたちの方へと目を向けます。

「うるまいッチね。返せと言われて返す怪盗がどこにいるんだッチ」

ヴァロッサはそう言うと、木から飛び降り、高笑いを響かせながら夜の中へと姿を消しました。

そこから少し離れた場所で、事の一部分始終を見ていた怪しげな黒い影が1つ。木陰に身を潜め、その顔は月明りは届きません。

「怪盗ヴァロッサか。ククッ、これはいろいろと使えそうだな……」

そう呟くとその影もまた、夜の中へと消えていきました。

■オープニングクエスト

大きな木の葉を夏の暑い風が揺らしていました。夕方にはなつてもその熱気が収まることはありません。

そんな暑まにも負けず、夕焼け空に向かって真っ直ぐ伸びる1本の大きな木――ここは歌風の龍樹。

いつもはにぎやかなこの場所も、皆この暑まに参っているせいか、今日は静かです。

しかしそれは、長くは続きませんでした。

夕日を背に受けながら、1匹のツタエバチが歌風の龍樹へと向かっています。

行き先はウタカゼの師、フィノ師のところですよ。

そんなことは知らずに、フィノ師は部屋の窓辺に腰掛けながら、優雅に紅茶を飲んでいました。「今日は何も無い平和な1日だったわ。いつもこうだよ」といってのだけれど

そんな期待を裏切るように、風に乘って飛んで来たツタエバチがフィノ師の肩にとまりました。その足には手紙がくくり付けられています。

「こんな時間に珍しいわね。いったいどこからの手紙かしら?」

手紙を受け取りゆっくりと中を開くと、フィノ師の表情が曇りました。

「まあ現れたのね。しかも今晚なんて……。急がなくて」

そう言うのと、フィノ師はすぐさま手紙を書き始め、ウタカゼのもとへとツタエバチを飛ばしました。

ここでは、フィノ師はそれぞれのPCにツタエバチで手紙を出したこととなり、PCはフィノ師の部屋へと呼ばれます。

GMはPCが何をしていたのか尋ねてもよいでしょう。

PCがフィノ師の部屋に到着したら、次の文章を読み上げてください。

ウタカゼが部屋に集まると、フィノ師は慌ただしく今回の要件をしゃべり始めました。

「急な呼びかけに感じてくれてありがとう。実は今回、しっぽの王国のエポナ姫から突然の依頼が来るの。それでその内容なんだけれど……」

フィノ師はそこで言葉を区切り、エムルンから届いた手紙をウタカゼに見せました。

「あの怪盗ヴァロッサから予告状が届いたの」

PCは怪盗ヴァロッサについての情報を聞くことができます。

GMは、PCの質問に合わせて以下の情報を提示してください。

・フィノ師が知っている情報

「怪盗ヴァロッサは変装が得意なイタチ族。変装の種類はさまざまで、男に変装することもできる」

「これまでいくつもの村や国から宝が盗まれているけど、いまだに捕まえられない」

「神出鬼没で、突然現れては証拠を残すこともなく去って行く」

「狙われたのは、レンコン洞窟で最近発見された希

望のアメ玉。これは大きな人々の宝だったようで、口にすればどんな願いも叶うといわれていたみたい。だから今はしっぽの王国で大事に保管しているわ。でもこの宝のことはレンコン洞窟を発掘しているネズミ族以外にはまだあまり知られていないはず」

フィノ師は顔をしかめ、不安そうに眼差しをウタカゼへと向けます。

「ここで情報を手に入れたのか——嫌な予感がするの。だから、今回はその宝をウタカゼに守ってほしい。予告状には今晚宝を奪いに来ると書いてあるわ。すでに外には乗りウサギが用意してあるから、それに乗れば夜には王都エムルンに到着すると思うわ。みんな、なんとしても宝を守ってちょうだい」

フィノ師はそう言って、ウタカゼにすべてを託しました。

GMはPCに乗りウサギシートを配り、シートに必要な事項を記入させてください。

▶ストーリー①に進む。

■ターニングクエスト

ウタカゼが王都エムルンに到着すると、夕陽はすっかり沈み、夜になっていました。

昼間のような暑気はありませんが、その代わりに肌で感じ取れる妙な涼しさと不気味な静けさが辺りを包んでいます。

エムルンの入り口の門には数人のネズミの兵士。そしてウタカゼに手紙を送った、しっぽの王国の姫、エポナがいました。

エポナはウタカゼの姿に気がついて駆け寄ってきます。

「ウタカゼのみなまん、お待ちしていました。あの怪盗ヴァロッサを捕まえるために、ウタカゼに協力をお願いしたのです。間に合ってたよ……」

そう言うのとエポナは数人の兵士を連れて、ウタカゼを宝の元へと連れて行きます。

ウタカゼも乗りウサギを門番の兵士に預け、あとについて行きます。

エポナの案内で城の中へと入ると、そこには入り口の倍以上の数の兵士たちが居ました。

そしてその中央には、兵士たちが守るように囲んでいる、透明な箱に入った希望のアメ玉が。

しかしその宝を目にした時、ウタカゼにはそれがただの宝には見えませんでした。

その宝の正体は、飲み込んだものを悪意に染めてしまうティアストーンだったのです。

●宝を回収

このままではティアストーンが怪盗ヴァロッサの手に渡ってしまいます。それにこのままティアストーンをしっぽの王国に置いておくのも危険です。

このことをエポナに伝え、早く回収しないと犠牲者が出てしまうかもしれません。

行為判定(全員):【愛情】+〈説得〉(難2)

1人成功▶突然、城内を照らしていた明かりが消えました。何も見えず辺りは真っ暗です。すると、宝の入った箱を持っていたウタカゼ(GMが任意に決定)は何者かに突き飛ばされ、箱を落としてしまいました。

全員失敗▶突然、城内を照らしていた明かりが消えました。すると、暗闇の中にエポナの悲鳴が響きました。

判定を終えたら、GMは以下の文章を読み上げてください。

何者かが走っていく音が聞こえますが、どこにいるかは見えません。

「早く明かりをつけて!」

エポナがそう叫ぶと、兵士たちが持って来た提灯で部屋が明るくなっていきます。

しかし、先ほどもそこにはあったはずの希望のアメ玉は影も形もありませんでした。

代わりに置いてあったのは、1枚の小まな手紙。エポナがそれを開くと、悔しそうに手紙をクシャクシャに丸めました。

「何て書いてあったんでチュ?」

城内があわてふためくなか、兵士の1人が尋ねると、『——マヌケなネズミたち。お宝は確かに頂いたッチ 怪盗ヴァロッサ』と書いてあります

手紙の内容をしゃべると、エポナは叫びました。「何をボンヤリしているの! まだ遠くに入っていないはずだ。手分けしてあの怪盗を捕まえなさい!」

その時です。

「チーッチッチッ!」

どこからともなく女の高笑いが聞こえてきました。

城の外へ出ると、真っ暗で人影は見当たりません。

ウタカゼがキョロキョロと声の主を探しているよ、「どこを見ているのかしら。私はここだッチ!」

背後から聞こえてきたその声は、ウタカゼは振り返ります。

城のてっぺんの旗はつかまる1つの影。

背中は月明りを浴び、妖しく揺らぐ黒いマント。

そしてその手には希望のアメ玉。

「我が名は怪盗ヴァロッサ。今日はウタカゼがいるみたいだけれど、所詮はこの程度。私を捕まえることなど不可能だッチ」

そう言って、ヴァロッサは希望のアメ玉をうっつりと見つめました。

「これがあの、口はすればどんな願いも叶うといわれる希望のアメ玉か。さて、それが本当なのかどうか試させてもらッチ」

そう言ってヴァロッサは宝を口に含もうとします。必死に阻止しようとするウタカゼでしたが、ヴァロッサは、ウタカゼの説得に対して聞く耳を持ちません。

そして、あろうことが希望のアメ玉を口に含んでしまいました。

それがティアストーンだということも知らずは——。

「うっ……これは、いっついなんぞッチ……」

苦しそうな表情を浮かべ、ヴァロッサの腫が徐々に赤くなるのが、ウタカゼにははっきりとわかりました。

すると、ヴァロッサは我を忘れ去るような、城のてっぺんから飛び降り、そのまま茂みのなかへと消えて行きました。

「ウタカゼのみなさん、なんとかしてあの怪盗から、私たちの宝を取り返してください。お願いします」

そう言って頭を下げるエポナ。

そしてウタカゼにはヴァロッサを追いかける理由が、十分にありました。

エポナたちは気がついていませんが、ヴァロッサは悪意に染まってしまいました。

そして、その悪意を打ち消し、ヴァロッサを助けることができるのは、ウタカゼだけなのです。

ウタカゼは預けていた乗りウサギにまたがり、ヴァロッサのあとを追いかける必要があります。

▶ストーリー⑦に進む。

■エンディングクエスト

ヴァロッサを追いかけてウサギを走らせるウタカゼ。ようやく追いついたその場所は、青霧溪谷のふもとでした。

ヴァロッサは振り返ってウタカゼのほうを見つめ

ます。

しかし、すでに悪意に染まっているせいも、とてもちろす話を聞いてくれそうにはありません。

突然、ヴァロッサはウタカゼに向かって襲いかかって来まし。

●悪しきものとの戦闘

「怪盗ヴァロッサ」1体と戦闘を開始してください。

怪盗ヴァロッサ		【悪意】	14	
種別	【悪しきもの】イタチ族	大きさ	40cm	
【能力値】		【技能値】	【ディスプレイ】	
【悪意】	4	＜戦い＞	1	5
		＜冒険＞	1	5
		＜疾走＞	1	5
【狡猾】	6	＜狩り＞	1	7
		＜感覚＞	1	7
		＜学問＞	1	7
【憎悪】	6	＜歌＞	1	7
		＜説得＞	0	6
		＜心話＞	0	6

攻撃方法
＜戦い＞ 曲刀
＜狩り＞ ボウガン
＜歌＞ 鳴き声

神出鬼没でどんな宝も華麗に奪う女のイタチ。黒いマントは夜に身を隠し、その身軽さと賢さでいくつもの罠をかくぐり、未だに捕えられたことはない。

●エンディング

ヴァロッサは力なく倒れると、口からティアストーンを吐き出しました。

そして、ゆっくりと目を開き立ち上がりまし。

その瞳はもとの綺麗な色に戻っています。

「私は……いったい何をしていたんだッチ」

ウタカゼは、宝の正体、そしてヴァロッサが悪意に染まっていたことを話まし。

すると、ヴァロッサは驚いたように目を見開き、「そうだったのか……」と細かい声を漏らしまし。

「まが私としたことが、私を捕まえようとしていたウタカゼに助けられるとは。なんという不覚だッチ。しかもあれがそんなに恐ろしいものだったなんて……まったく、他人の情報は簡単に信用するものではないッチ」

●どこで知ったのか

しっぽの王国に希望のアメ玉があることは、ネズミ族とウタカゼしか知らないはずなのに、ヴァロッサはいったいどこでそのことを知ったのだろうか。

行為判定(全員)：【知恵】+【感覚】(難3)

1人成功▶情報をくれた者は「フードで顔は見えなかったが、ウロコに覆われた尻尾があったッチ」と、ヴァロッサにも正体はわからない。

全員失敗▶「怪盗がタダで情報を渡すなんてできないッチ」と断られてしまう。

事情を話し終えたヴァロッサは突然駆け出して、またお得意の高笑いを辺りに響かせまし。

「チーッチッチッチ！ 今日のところは潔く引いてやるッチ！ けつ次はこうはいかない！ この借りはいつか必ず返すッチ！」

そう言い残して、ヴァロッサは月の光を背に受けて夜の中へと姿を消してしまいました。

それから数日後のこと。

その日も綺麗な満月が夜の暗闇を照らしてました。

その時、聞き覚えのある高笑いが。

「チーッチッチッチ！ これはお前らが持つべきではないッチ」

黒いマントをなびかせながら、夜を駆け抜ける怪盗ヴァロッサ。

しかし、その手に握られているのは宝ではなく、おこらが奪ってきたであろうティアストーンでした。

「これ以上、私と同じ目に遭う奴を増やすわけにはいかないッチ」

それはヴァロッサなりの恩返しでした。

ヴァロッサが各地から奪ってきたティアストーンは、歌風の龍樹へと運ばれてきます。

しかしあの事件以来、ヴァロッサの姿を目撃したウタカゼはいません。

きっとヴァロッサは、ウタカゼに会うのが恥ずかしいのでしょう。

けれど、いつの間にか運ばれてくるティアストーン。ヴァロッサの気持ちに気づいていた龍樹のウタカゼたちは決してそれだけで十分でした。

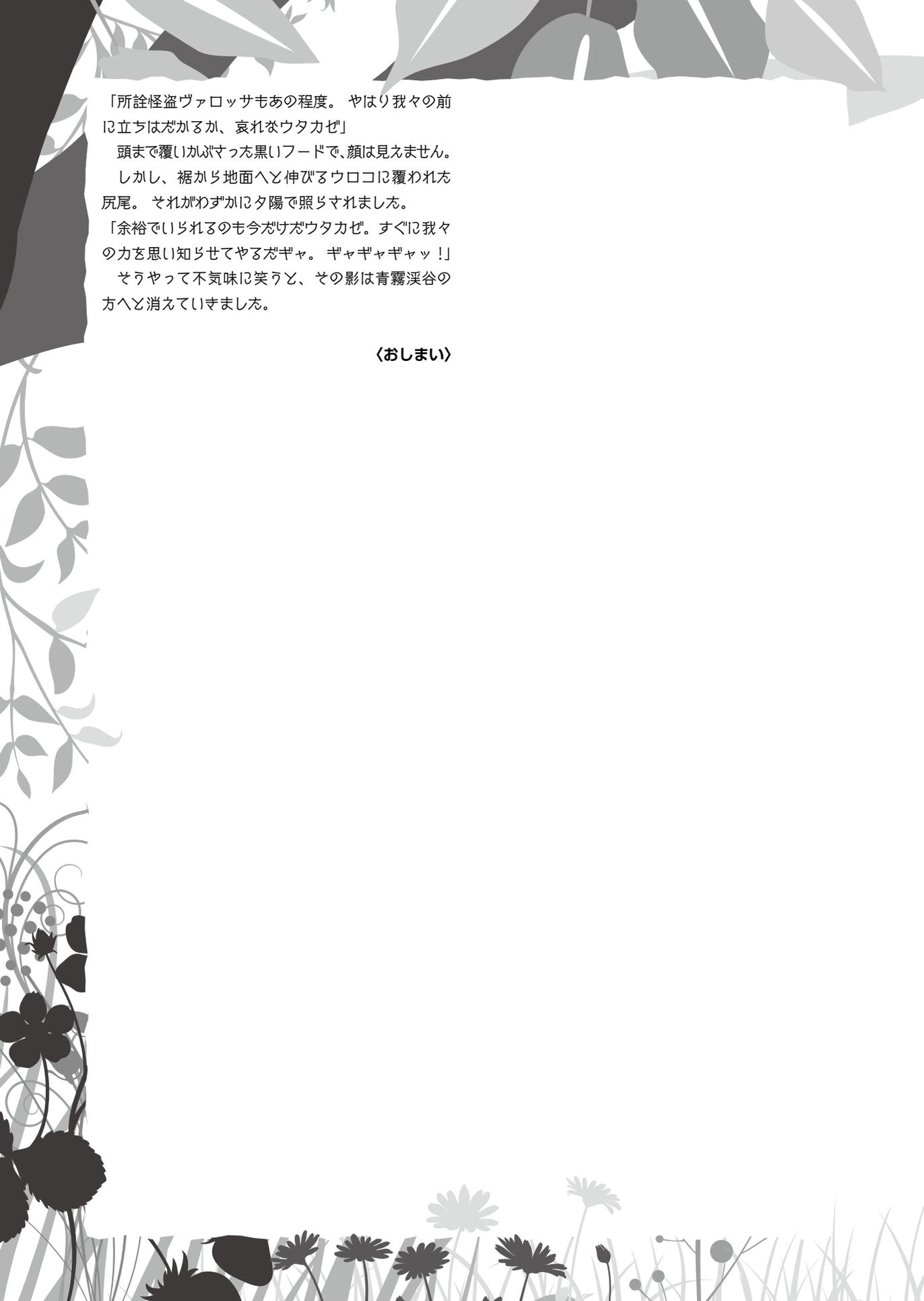
だってそれは、悪意の源でまた盗んでしまう、怪盗の感謝の気持ちなのだから——。

■エピソード

ここは青霧溪谷のふもと。

風が砂埃を舞い上げ、夕陽が出ているにもかかわらず、視界はあまり良くはありません。

そんななか、青霧溪谷に近づくと怪しげな影が1つ。



「所詮怪盗ヴァロッサもあの程度。やはり我々の前に立ちはだかるか、哀れなウタカゼ」

頭まで覆いかぶまった黒いフードで、顔は見えません。しかし、裾から地面へと伸びるウロコは覆われた尻尾。それがわずかに夕陽で照らされました。

「余裕でいられるのも今だけだウタカゼ。すぐには我々の力を思い知らせてやるぞギャ。ギャギャギャッ！」

そうやって不気味に笑うと、その影は青霧溪谷の方へと消えていきました。

〈おしまい〉